明陵会館訪問記
～倉高の歴史を感じて～

12月20日、明陵会館内の校史資料室を取材した。明陵会館は本校創立百周年の記念として卒業生の方々によって設立された同窓会館である。そのなかにある校史資料室には小倉高校113年の歴史を感じさせる資料が数多く保管、展示されている。

校史資料室に展示されているもののなかには旧制小倉中学の校舎模型、本校卒業生であり、偉大な研究者で、藤田賞の名のもとになっている藤田哲也博士の記録、過去の制服、昔の教科書など、倉高生ならば一度は目を通しておきたいものばかりだ。多くの展示品は手に取ることが可能で、昔の倉高を肌で感じることができる。

夏の甲子園二連覇

本校は、1947年夏の甲子園で初優勝を飾った。更に翌年の48年にも優勝し、二連覇を果たした。当時のエースとして五試合すべての完封を成し遂げ、本校を連続優勝に導いたのは福嶋一雄先輩である。福嶋先輩は卒業後、早稲田大学の東京六大学リーグ優勝、八幡製鉄（現日本製鉄）の都市対抗制覇などに貢献して、「福嶋行くところに優勝あり」と言われた。現役引退後はテレビ、ラジオの解説を通じて、高校球児を見守り続けた。2013年にその功績を評価され、「野球殿堂入り」を果たした。明陵会館には、甲子園優勝旗のレプリカをはじめ、受賞当時の盾や賞状、福嶋先輩の等身大パネルも展示されている。

また、現在では甲子園の風物詩となっている、球場の土を持ち帰る行為を初めて行ったのも、福嶋先輩だ。

▲歴史ある展示物に感動

同窓会事務局

明陵会館で同窓会のお仕事をされている原田その先輩にお話を伺った。原田先輩は小倉高校の31期卒業生で、昨年からこの会館で事務をしている。ご自身が卒業してからは小倉高校と離れていたが、お子さんが入学したことをきっかけに、PTA活動を経て、現在この仕事をしているという。主な仕事は卒業生などからの問い合わせ対応や、同窓会費の管理である。特に年配の卒業生で、同期のつながりを心の支えにしている方がいると原田さんは言う。印象的だったのが、現在は札幌に住む高齢の卒業生の方から届いた会費のお話。卒業して長い年月が経っているのに、遠い地・札幌から送られた会費には、あて名が震える字で書かれていたそうだ。母校を大切にする想いが感じられる。原田さんから在校生へメッセージを頂いた。「皆さんが明陵会館を訪れるのは、学校探索のときくらいでしょうか。しかし誰でも見学可能なのでぜひ来てください。」明陵会館はいつでも誰でも見学可能なので、ぜひ一度、倉高の歴史を感じに行ってみてはどうだろうか。

北九州を映画の街へ

12月17日、北九州市役所市民文化スポーツ局文化部文化企画課にある北九州フィルムコミッション（KFC）を取材し事務局の上野和華子さんにお話を伺った。フィルムコミッション（FC）とは、映画やドラマ、コマーシャル等の撮影を誘致し支援を行う団体で、全国に1123団体ある。

KFCはその中でも市役所の中にあり、市の職員が7人所属している、全国でも大きな組織である。KFCは映画やドラマを誘致し、他の大都市では撮影不可能な爆破等の大規模ロケを成功させてきた。特に「相棒劇場版Ⅳ」では小文字通りを300m封鎖し、3000人のエキストラが参加した。エキストラや観光客の誘致にもつながり経済効果をもたらしている。

▲KFCの事務局訪問！

地域の活性化

昭和63年に北九州市を含む主要な都市で生活環境調査が行われた。結果北九州市はその中でも最も生活しやすい都市だということが分かった。しかし、その事実に反して北九州市は最も生活しにくいというイメージを持たれている残念な事実も明らかになった。だが、KFCの活動によってそのイメージが着実にアップしている。平成22年に行われたアンケートでは、北九州市のイメージの中に「映画の街」という語が見え始めた。平成26年には、KFCの『MOZU』などテレビドラマへのロケーション協力が評価され、東京ドラマアウォードの特別賞を受賞した。平成29年にはKFCの活動による経済波及効果は約5億2千万円に達した。このことは西日本新聞に掲載され、北九州市のイメージアップに貢献している。

ロケ地としての魅力

北九州市のロケ地としての魅力は主に2つある。1つ目はロケーションの豊富さだ。東京のように高いビルが並ぶ小倉市街、自然豊かな平尾台、歴史的建造物の多い門司港など、1つの市の中で多くの種類の背景を撮ることができる。例えば『MOZU』では、小倉井筒屋が東京銀座のデパートとして撮影に使われた。

2つ目は市民の協力が手厚いことだ。KFCにはエキストラ登録制度があり、県内外から合計約9000人もの人たちがエキストラ登録をしている。登録者は小さな子供から80代の方まで幅広く、登録している理由も様々だ。例えば、『相棒Ⅳ』では、約3000名ものエキストラが撮影に参加した。ただ共通しているのは、エキストラとして映画に参加することでより映画を楽しみ、協力して良い作品を作ろうとする思いだ。

映画製作を支援する

KFCの仕事は映画のロケ地の提案、撮影時の建物や道路の使用許可の申請、撮影の準備など多岐にわたる。撮影自体にかかる時間は1ヶ月だが、映画のスタッフとは、撮影に入る2、3ヶ月前から打ち合わせを重ねているという。「地元の方に施設利用を申し込む時は、第一印象が大切です。」と上野さんは言う。道路を封鎖する時や深夜の撮影の時は、近隣住民の方々の協力が不可欠である。映画の意図を理解してもらい、協力をしてもらえるよう、地元と映画の撮影隊をつなげる円滑なコミュニケーションを心がけている。映画作りには体力も必要だ。映画で使う施設は、昼間は一般客が利用するので、撮影はどうしても夕方からになる。深夜の2、3時までかかることもあったそうだ。

人と人がつながる映画

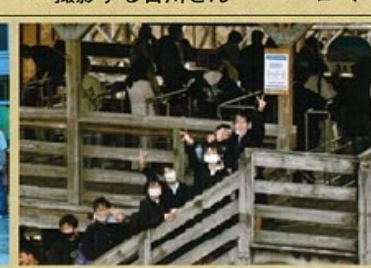
映画を通じ、北九州に良いイメージを持ってもらえる点に、KFCの仕事のやりがいがある。「たまに、エンドロールでKFCのことを言及してもらえるのですが、それを見た時に、あー、やってよかったな、って思いますね。」と上野さんは語る。

KFCの支援作品は、映画から情報番組のロケ、トヨタや大塚製薬など有名企業のCM、MVまで多岐にわたる。その中でも映画『図書館戦争』の撮影で、北九州市立中央図書館がロケ地となっていることは多くの人が知っているだろう。全国の図書館の中から選ばれたその独創的なデザインが、原作の「関東図書基地」のイメージにぴったりと当てはまっていることから、ファンの間でも「聖地」として欠かせない巡礼スポットとなっている。また、同建築家の設計した北九州市立美術館において、大ヒット映画『デスノート』のワンシーンが撮影された。近未来的な設計が引き立てる、緊迫感あふれるシーンはまさに圧巻だ。

倉高とKFC

本校2年6組の古川瑶子さんを監督とした高校生のグループがKFCの支援を受けて、自主制作映画『明日、晴れますか』の撮影を行っている。この映画は、「愛」を様々な視点から描いており、性的マイノリティーへの理解を広げることを目的としている。古川さんは、学校のロケ地を探している際にKFCのことを知ったそうだ。KFCからは学校やJRなどの施設を借りる時の協力、撮影の付き添いなどの支援を受けている。KFCとつながったことにより、北九州市の人権推進課と共同で人権のイベントで話すことができたりと、交流の輪が広がったという、映画のロケを通じ、地域の良さを再発見できたりと収穫も多い。そんな古川さんたちが作る映画は、5月下旬にオンラインで配信される。多様な人々の存在が身近に感じられ、当事者以外の視点にも着目した、高校生達のフレッシュな感性と演技が詰まった一作である。「作った人も見る人も、映画を通して様々なことに気づくことができ、考えさせられる作品です。」と古川さんは語っている。

▲撮影する古川さん


▲文化祭楽しかったね！　写真提供：写真部

編集後記

KFCと明陵会館に取材に行ったことは大変貴重な経験になった。この経験を今後活かしていきたいと思う。（藤原　耀）

市役所で印象的だったのは最上階展望台だ。小倉を1周見渡せる造りで無料の双眼鏡もある。是非一度は訪れてみてほしい。（後藤　有美）

北九州にはまだ知られていない全国に誇れる魅力がたくさんあると知った。そういうことに気づいていきたい。（古賀　晴花）

取材を通して見聞が広まった。記事から何か1つでも印象に残るものがあれば嬉しい。（臧　西）

取材をして記事を書くのは今回が初めてだったので、貴重な経験になった。SSHの発表にもこの経験を活かそうと思う。（奥村　博希）

KFCの取材では、市役所の方々が優しく、明るく素敵な職場だと感じた。また明陵会館の取材では倉高での出会いは一生もので大切にすべきと学べた。（久恒　風香）